夕張日誌

全

特1
318

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318

ガラス使用

東西蝦夷山川
地理取調紀行

夕張日誌

多氣志樓藏板

凡例

一 ユフバリ 去箱館百余里 惣石狩三十余里 を石狩十三ヶ場所 トクビタ 上サツポロ 下サツポロ ハツシヤブ 上ツイシカリ 下ツイシカリ 上カバタ 下カバタ シユマヽツプ 上ユフバリ 下ユフバリ シノロナイホウ の内に高く上下二ヶ所に分れ其地エベツブトの左の源にして西南をユフブツサルに境し西北より艮はポルムイ ビバイ ソラチの水源に接し東は十勝のサツナイ（イヌ井）長し隣る是迄（ウシトラ）夷地第二の大長之安曼四ヶ巳年七月其川筋よりシコツ川をぢ千歳今年の後へ新道見立の為に境域を實検しユフバリ誌二巻を著し夫よりシコツ湖に上り戻りてヲサクマナイより海濱タルマイ濱に是より新道見立の為に埜舞岳の東西を遍行し是を見てシコツ誌一巻を著し共に其地図等を画し函館府に納めり今に四巻を

国立国会図書館 タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318
ガラス使用

合せ要を摘て一巻とす此書は是迄頗多人等は己が年齢をも辨へざる
者の拙を得へ来れども然らざるものまで天地の開闢人倫の起元等を得
へある事しまた
皇國太古の手振は地に殘れるをも審に記して夕張日誌と名つ迄は
されば此一巻にて風土和らひ新屋の開き方等悉て大概を見るに足る
為し志士等は審なるものを閲せんの意あらば原稿四巻を熟讀せ
業延元庚申中冬お下谷新屋敷僑舎源弘しるす

宮内省圖書館

丁巳夕張日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

白井氏藏書

石狩の元小屋に歸ては多くの土人を集めて支配人（ナの部屋 林太郎）等熊（チンコロ）に共話して
種痘を施せる柳此地第一の災厄とするに痘瘡にて人口の為に滅損する
事少うしに鮭羽村垣君深く是を憐れ出ひ多くの醫師を求しまひ
稚島の隈にまでも永く此方を施さしめ其災厄を除さるゝ人となり
今うりはたかさの神も國人に頼まれし君のいさをかし
此中に夕張の土人等居合せるを（シリカンチウ アレユイト ヤエタルコロ アフンデクル）四人雇て同行せんの事を談ず
八日艤を出長谷川氏（儀之印）酒一樽（二斗入）を納ふ夜宿津石狩（ヨ）衛丙（安史四丁巳七月）

宮内省圖書館

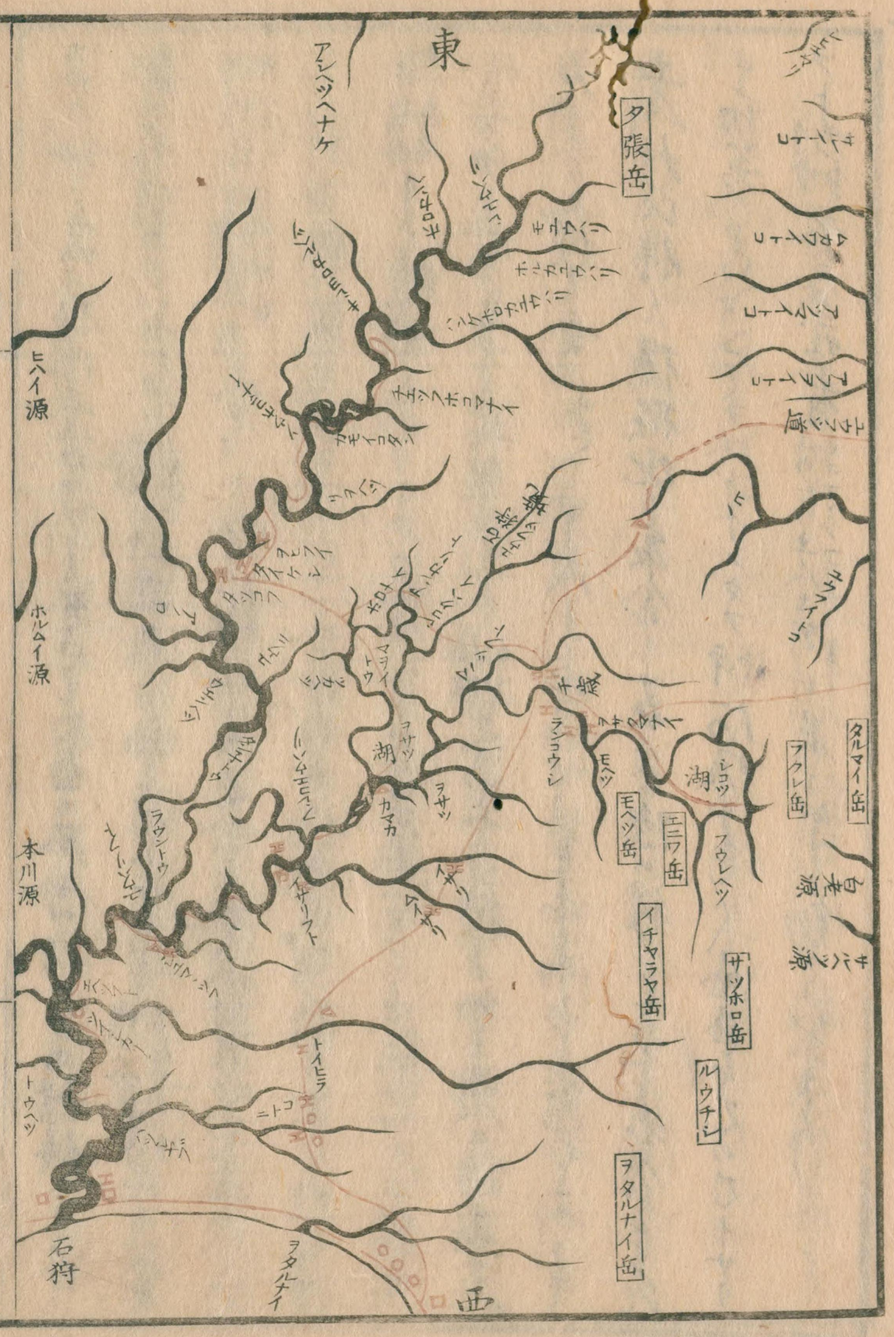
国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

九日重務四塞發舟一リエヘツブト（巾卅余）ニ至ルエベツトハ鬼唇（イクチ）の如くニツニ分ル
処ニ依て志ノ号ニ此支ニ若ハ人家十余所有ルトハ見ヘ今ニ両岸
悠然蒼蔚恰も天日を翳ふるかし誉老鶴去て啼鳥熱て曩（サキ）時ニ異ナリ
椿象（ツウヘウエン）も色黒ニ利觜（ホロキヽリ）敢も倍ニ觜利くなり志ノ所ハカモイウツカ（漢）チヤノイベ（右川）
チレ子ノタフ（カタキヌカケ）まこの流蜿蜒ニ逆流あり上ニ沿ヒ茫茫葬葬ニ樹ニ柳（シユシユ）
桑（テシヤニ）赤（チキシヤニ）ハ（ヒンニ）たむき椋（ヲヒマウケ子）赤楊（ラン）かつら（アレユニ）利桐等ニ猟猴（フンカラ）桃柴（ハツ）蒲萄の蔓（カラム）鍾鶴もカモ
イウライウレ（急流）ハンケソウバ（左川）ヘンケソウバ（左川）ホンカヤニカルシ（左川）カヤニカルシ（左川）トフ
シホヲマナイ（右川）シユブンベツ（右川）マワレノカツトコン（平地）チエトイトシユンナイ（右川）此迄
鵜（ツル）多し（ヘタヌ二股）（右シコツ左ユウハリ）此支ユフバリ此水ニ白く渇ヘり
左リユウバリニ上ル一リ余ラウントウ（周囲十里）周リ茅多く芰（ヒシ）實（トチカミ）荅菜（アサヽ）茶菜（ヌナワ）蓴菜通

特1
318

又流木多く横ヘリ渇ヘの節ハ不ニ舟通ハ難し此ニ上リ二里許ニ至テ夕長
子トウ（沼）（中六十丁長一リ余）是も茅蘇多く蓮沼（ヤチ）振放不ニ至廣袤知難ニ至ル夫ヨリクン子トウ（闇沼）
ハ（右川）是も上ニ蓮沼也水渇ニ落ル故ニ志ノ号ニ二ヘシヤイウシナイ（右川）バンケヌブカ（平地）ヘ
ンケヌフカ（平地）アユノタフ（同）クツタラ（左川）古村（フシコタン）変も茅ハ人里ニ至テ変改度ニ五十六軒
有し其ノ今ニ至ハ一軒も行し是ヨリノヤサロウシ（平地）アチヤンベ（左川）ウエンヘツ（左川）
此川第一の支流ニ至ル小字ニ多く源ホルムイと向背して少しの山有
変を過ぎてクツタラ（右川）此迄地味高く雪融の節も水上ニ至る故ニ畑ニ至ル是迄を
上ユフバリと云始是上を下ユフバリと云ハ此人ニ関ニ最上ニ来ル此ニ来ル時薬内
の志者言を解し渇ヘリ故ニ上下来ヘリと言ヘ余此ニ至テタツコブより舟を
下して見ヘれバ始是タツ
コブ迄を変ニ記す
ニ至テビラケシヨマ（右川）テー子ナイ（右川）トイビラ（平）ホンビラ（平）ホロビラ

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

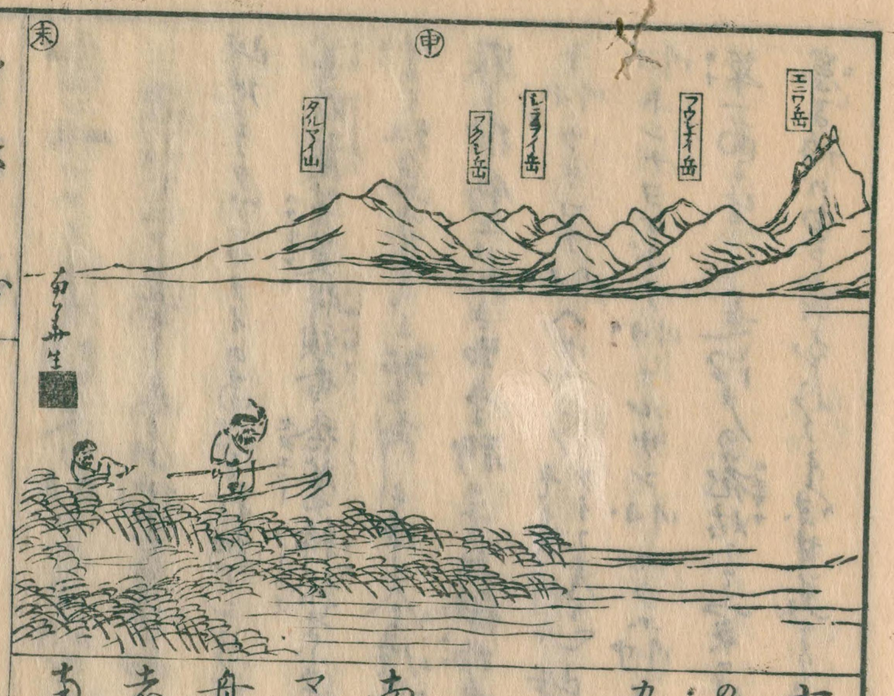


共ニ山の下崩平ゐてユフニ川（右の方）
此川第二の支流小さく多く源はユウニノホリと云山ヨツカベツと向背を
此處より相山有川に追て急流を越てアノロ（左の方中十万ヨ）平地人家此あり
此川第二の支流小さく多く源はホルムイの源と并てユフハリの小ニ口に行り
ゐてワリヲマナイ（平）ゐてタツコプ此ニ至てマヲイより越来て宿りし也（是より上七枚目を変に讀つくべし）
相二度ヘタヌ二段より右に入り（一テ斗）シユマヽツフ（川中五宮）小休ニ（経津石持五）ヨ傍に土人一
新（イワクケン）有変も堆木を人家多くゐて十三ヶ場ニの一なりしと云
本名シユマヲマフ（岩有）と云義なり源を察観長より差る事小名多し
境標（石持ユフブツ）有ゐて事岸范地多く本立盤しキナチヤウシ（右川）ホロヒリ（平地）ウレロヲ
レウシ（平地）ピンナイ（右川）上に沿ち周一（リヨ）変にロコンと云針ゐる真あり此沿の上ロコモ（ヌマ）

ツナイ小川と云ひり此同名ユウフツにも有ロコンは魚の名モツはヲツの轉語にて居る
義也是相なりにてトケヨコ刺魚(トケウヲ)の義也 此國惣ての物にコの字を附る 錢コ茶コ 字なり 漢名黄顙魚(キ)
本綱 鯛魚(カラカラ) 和名鈔引崔禹錫食經 又ギバチ 和語 水蜂 水戸と云 黄食されたる水種及び小児痳疾を治
せし二頭黄顙八鬚魚。緑豆同煎一合餘。白者作羹成頬服。管散水腫自消
除 醫林集要 また嵯峨にてミコウヲ近江にてアカサ筑前ハチフリ 濃州アカサス 播州
ミコ女印と云有色少し異なる斗也とて 鎰鎰 魚氏 又出来るは種々の物にて土人の語に魚の色
を生ずるの土性にて実る物也と早歳にて水清時は色赤く雨ゆゑ水濁れを通しと云り
土人相比腫にて猶猴桃を取食し其後の際の種にて是を黄食せられ
其切若しとて也てヲコトイノタフ 平沢 河流まもしく屈曲せし右の方イサリ
フト 川中 世會 番屋蔭有 ユウフツ土人七彩 シユマツフ 西り半 前に梁を鎖にて架出せり

川筋小字なり上に二流にあり 右ムイサリ 左イサリ 人家 石狩土人 ユウフツ土人七彩 ち源を家縄長より
来る此西村を樋平越新道より通る 桿森栗畑なし
二股より左りシコツに至るシヨトンナイ 右川 ソウヘツ 左川 フシコユフハリ 左川中 世會 昔は
夕張川此にて落来りし由今は范沼に移りて舟通し難しとヒトウシ 右川 イヘツバロ
沼口 変にて夜に入ひり西岸雑木絶て葬葬する菫原の中此方彼方数條に川
も水淡くして舟振り拾ひられ此辺此月魚多く漱に来るを見ん擢を以て是を
打殺し数尾を捕ひり海より廿六七里の水上に此魚を見ん事ハ実に奇とし又
不ゆゑ原の鮮居に至りて也てカマカ 淡 と云に到る一本の人を歓木あり下に宿せ 姫イサリ 下三り
晩き漸収月初斜漏漫法渺極目無際西を顧ひは 毛舞(タルマイ)シコツ 絵庭(エニワ)サツホロの
岳を隔てとし雲多に実出せ清風に度ひり故にて夜坂の熱を忘れて一眠しけり

宿もなさてよひいこゝに旅寐せん
川手の合歓木も眺るこゝ話なり
弘此ゝ藥圃櫛餘を閲せるに羽州秋田
城外有河其源湍注於山谷故其水
則淡其中産一奇魚殆如鞋底魚
大都五六寸較比目大同唯鬣尾小異
味亦似比目而美土人呼曰鷹羽比目
ゆゑは見なるゝ此魚エヘツフトより本川
筋にて一魚をもとめるゆゑ右役此方に
のこ産せるも亦奇とせん



十日清平明霞をちこちの芦荻の間より擢
の影に遊きたるの立に我等も遊るゆゑ数度
カリンバブト川口出るやヲサツトウ沼
沼周三川ゟ人家九軒源イチヤラの南より
来る此村も樋平通りなり
南シコツ并てシユクバイ等清宴に座入るゝて
マヲイ沼周三ヨ此日芦荷をなすに向より小
舟に拝て鶴首に括撿(ヲツフ)を攪て魚を欲し出
者なりかの院家の三口人も此にたんと思ひ
南方にアンガリト周二位上にウエノタ岬出タン子

エンルン岬 マヌイトウ 岡ニ クヨヨ 入リ 左オツカベツ川ヲ 至冷水平崖 ヨリ 上陸ヲ

源ツカヘツ ヲ ユフニ岳ヨリ 来ル 此地実暦ハ畑多ク有リ 麻多ク刈リ 荒ス 雨

此地ヨリ ヲサツマヌイノ 沼ヲ 打越テ シコツ 宗親山ヲ 眺メ 頗ル 絶景ナリ

茅敷蕭芜 (ムケカシ) 黄腰頭香 (セタエンニー) 香蕈 (アイカラ) 繁縷 (カヤフチナメシ) 等ノ 紅白業 (キナ) 莫大ナル 艶彩ヲ 画ク 又 蓼ノ (スンムニ) 根ヲ 掛ケ 釣ヲ 出ス ヲ 即チ 欄 (コムニ) 柏魚ノ 事ナリ

子小川 ウリロチ小川 ヘケレコツ (ヲイコヲラ) ヲ 過ル 此辺 柴 峠ニ 登ル

小川 ホンナヨケボチ小川 フルサン小川 ユウニ小川 ヲ 過テ 途中ニ 華錦 (カセクルク) 蘭 (ムヨロギ) ヲ 多ク 見ル 又 吉野 (ユクトロ) 草 (キナ) 一面ニ 生ヒ リ 是 沢ノ 花姑 (ムチキヤ) ヲ 実ノ 生リ ヲ 見ル リ 山地ヲ 去ル 大ニ 無 (ハク) 噪シ 許ノ 白キ 実ヲ 結ヒ 其葉 ヲ 採テ 葡萄 (ブドウ) ノ 如シ 土人 是ヲ 平処ニ 掃ヒ

ヨリ 上陸ヲ 五六丁 ニシテ カタムサラ 各地ノ 名ヲ 押シ 頭ヲ 擡レハ 艮方ヨリ 南ヲ 望ミテ

ハチヤンベツ岳 (ユフハリ) ホルムイ岳 (ユフハリ) アノロ岳 (ユフハリ) ヨヒライ岳 (ソラチ) 岳 (ソラチ) 峡連 (ヨロ) 嶺

ヲ 越シ 遥ニ 蝦夷富士 (ヒラオ) ヲ 望ム 峰頂 雪 (ユキ) 深シ

南ニ 第列 (チュクレツ) 岳 (イタイ) 板井列 (イタイ) 岳 (サル) 沙留岳 ヲ 眺ム 山ヲ 麻布 ヲ 懸ケ 帳 ヲ 設ケ

猟ヲ ナス 才 ヲ 散セシ 如シ ヤエタルコロ 一頭ノ 熊ヲ 射

ヨリテ ニタツ ヘツ小川 ヘルウ ヘツ小川 ヲ 渡リ テ タツコフ (ヤムワツカヒラオ) 峡ニ 至ル コトニシテ 人名ノ 家ヲ

富ヲ 繞ス 栗稗 (ムシロヒヘハ) 餅粟 (リテナアマ) 小豆 (イシケン) 蕎麦 (ソバ) 白胡瓜 (チキ) 南瓜 (セタエンー) 等 多ク 作リ 又 倭

蕎麦ヲ 挽キ 其ノ 飯ヲ 炊テ 汁湯ニ 入レ 番ヲ 以テ 食ヲ 勧ム 針松 (トマンレ) 焔 (イツツシ) ヲ 採リ 来リ 之ヲ 燃シ 家ヲ 照ス

此地 尹一 ノ 博識ニシテ 故事 (チャレコマ) ヲ 語ル

雑ヘ 居ルヲ 以テ 相貌頗ル 威ル テ 稜骨 (レイ) 黄髯 (ウ) 胸ヲ 掩ヒ テ 弓 ヲ 執リ 矢ヲ 関ス 年 (レツライカヒヤチ) 七十 歳

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318

ガラス使用

素を六十八戈と云ふ繁き土人は歳を知ざる者多し能く知りたるといへ共れを
濱邊の者の事之我ことを何を已々歳を知ざる事なれ蘭は物の算数も知き
振ふ内地とは思ひ入れとも数法古より伝はれりされと文字なき故に支平と日の
吉凶ハ割出し伝ふる事なれ故に土用彼岸社日入梅定の入冬至夏至八十八夜節
分月の大小星宮ハ月の盈虧草木の榮枯雪の消力虫の音鳥の囀り振花の喋さ云ふ
力獣の穴に出入を以て其年おこ年に引出割出ふ一日二日の遅速をあれとも三日
四日の速をもちる事なりしまた月の名も考言あり
正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
其義イノミチユフとは神祈月と云義之此月を逆の始なれは年中の事を
神に祈る月なれは之カモイを神なりノミを乞祈る義か則日本紀神代考に

下枝懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉ゆゑ萬葉集巻三天地之神乞禱なと
見えて又叩頭乃美ハ祈也禱謝之義又云奴加豆久額衝也倭名鈔叩頭
虫和名沼加豆木無之周礼鄭註頓首如今叩頭之類首
叩地也
通稱
とも見えたりハフラフとは此月より魚も川に上り鳥も高地立る義なり大の
月をホロ小の月をホンチユフ閏月をイカシユマチユフと云ふ中ハ日の数也
朔日 二日 三日 四日 五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日 廿日 廿一日
晦日を十と二十と合てよび十一を一と十とを逆に讀合せる又鈔の算も此
如く卅一文とは一を先に次に卅と讀て四十を二ツ二十を合せる故にトホツと云トを二ツ
ホツは二十之五十は十と四十と合せ六十とは三ツ二十を合せ七十は十と六十と
合せ八十は四ツ二十を合せ九十は十と四ツ二十を合せ百をいまた五ツ二十とも云
また上二百三百四兵言葉こそ異をおも内地の数に異なる事なり
余ハ若し東和当
国志に委くも

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318

ガラス使用

然れ共未だ草木なく獣鳥虫魚もなく只其様々の物を調ひ給ふ
事ならで二神の後の世を続て國土を経営し給ふ神なき故に如何せんと
案じ給ふ時に二神の御前に一羽の鶺鴒飛来りて尾を上下す其を見給ひて眼を下げ給く
たりしかバいと面白しと思召て二神互に御行ひ給ひて御子あまたの神達を
産給ひぬ其の中にヘケレチユツフ日神 クン子チユツフ月神として光をうつしまた二神の子
らは此國の霧靄深く暗きを照し給んとヘケレチユフを雌岳よりクン子チユフ
を雄岳より残りなる黒雲に乗りて昇天し給ひ其より後物の形し萌根の
始を今の後方羊蹄の岳より産まれ給ふ神達或は火を生し或は土を司り
或は火を生し給ふ神に於て粟稗黍の種を耕植る事を教へ土を司る神を
産み木の事より木の皮を剥て衣服を織る事を教へ又魚を捕る水を司る神へ金を司る

神代ヨリ伝ハリ来ル物語ニシテ其ノ始メヲ知ラズ
サレドモ其ノ事ノ古ク且ツ珍ラシキヲ以テ
ソノ伝ハリ来ルヲ聞キ伝ヘテ之ヲ記シ
置キ後ノ人ニ伝ヘントスルノ意ナリ
抑モ此ノ書ハ上古之世未有文字貴賤老少口々相傳前言往行存而不忘書
契以来不好談古浮華競興還嗤旧老（古語拾遺序ヨリ）
ノ有リ様ヲ一ツヲ吐キ出シテ大同小異アリ其ハ互ニ其ノ
志ヲ知ラズ其ノ事ヲ知ラズ終ニ神代ノ事ソノヤウニ
十日程ノ手人（サシヨウ）ニテ猛船（タケブネ）ヨリ来テ着ルヒラ左ノ崖ヨリ
船ヲ引キ上ゲテイワナイ（ヲカレヨマナイ）左ノ方ニ
タイケシ（コトシヤ）左ノ山ヲ人ヲ斬リ
アッテ家モ畑モ焼ケ舟モ焼ケ
穴奥ノ孫迄（ソンマデ）ハンゲタラ（カベンゲタラ）左ノ方ニフブレ（カイソウカ）左ノ
神橋（カイソウカ）ヲ架ケ出中百人余ノ
人ヲ連テ普神（アイノ）ノ像ヲ
彫リ付テ神橋ヲ渡リテ十二左ノ方ヘ行キ川中ヨリカモイチセ（神家）
家棟ノ如クフル山ヨイカウレタツコ（窓型）ト云ヒ
イル左ノ方エカレナンワッカ（左ノ方ニ）
沸キ出ル川ヲ渡リ一同ヲ曳連テ小舟ヲ浮ベ
舟ニ越テリイヒラ（高平）左ノ崖ヲ九十五丁程上ヨリマックッナイ（木ノ
子ノ如ク）ト云ヒ川ヲ渡リ一丈許下ヲ
三丁程廣カラン二千余ノ人ヲ集テ考ル実ヨ天下ノ奇観ト云ヒ山ノ川中ヨリ高ク三ツ
義経モ来テ来ル事ヲ喜ビ又来ル事ヲ約シテ帰ラレシ
十二日ヨリ晴雨一斬ル事ナシ小舟ヲ上リクヨヘツ（石川ヤ）ト云ヒ
ヲ過ギ川ヲ渡リ
是ヨリ西ノ方ヲ下リテ源ハサルノ山ヨリ来ル十人余ノ上ヨリ一ツノ滝ヨリ落ル

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

ホロレユシユタイ川是より上を神(カモイコタン)と云又レユホロとも云小高き和り眺望をよき高山なり

岩怪石峻嶮として見を驚すこと不可勝計水流急にして舟を引事甚難し此より到て南岸は絶壁巌を穿て小径を設く大岩ありて険悪なり

顧るにソウホコマ岸より一際の瀑布二條より来て高上三十丈(ホシソウ)小より一際の流山脈より数十條を分て懸乱をなし其川中に小ホロレフレベ大岩ありて五丈餘の鳥帽子の如き岩洞大サ畳ら洞中より神霊ありて云々教へ給ふを納めて拝むと云ふ又ホシレフレベ大サ畳ほどの岩

無数の蔦葉の蔓連をなり尾松と余杜との異州共を又左(ホシソウホコマ)高五十丈許より流出ること数十條

岩ともに其の上六七十丈を出れバンゲソウ(ホシソウ)高五十丈許より一口を落て岩

ホロレユマ高五十丈許より此岸よへンケソウホコマ(中略)高五千丈許

ホロレユシユタイ川是より上を神(カモイコタン)と云又レユホロとも云小高き和り眺望をよき高山なり

岩怪石峻嶮として見を驚すこと不可勝計水流急にして舟を引事甚難し此より到て南岸は絶壁巌を穿て小径を設く大岩ありて険悪なり

顧るにソウホコマ岸より一際の瀑布二條より来て高上三十丈(ホシソウ)小より一際の流山脈より数十條を分て懸乱をなし其川中に小ホロレフレベ大岩ありて五丈餘の鳥帽子の如き岩洞大サ畳ら洞中より神霊ありて云々教へ給ふを納めて拝むと云ふ又ホシレフレベ大サ畳ほどの岩

無数の蔦葉の蔓連をなり尾松と余杜との異州共を又左(ホシソウホコマ)高五十丈許より流出ること数十條

岩ともに其の上六七十丈を出れバンゲソウ(ホシソウ)高五十丈許より一口を落て岩

ホロレユマ高五十丈許より此岸よへンケソウホコマ(中略)高五千丈許

と云流石の石を跳ね水勢ひ山南岸より半機岩百許上れをヘンケソウ(内六丈)高二丈許より落る右の方レユムンテキソウ(中略)高二丈許より落る右瀧

岩数百落ち落る故よ吼ること雷の如し(ホヌ)

ハルキテキソウ(中略)左瀧

より二口よりより落る下の方は丹の如き穴多く有此ふと

を雑飯も上ること能ず飛魚奥斗の中も河中底深くて水色如

藍深くして悠々と思ふ此ふ南岸を三日程行て尽ること能ず

余百一口を落て岩を穿て寒き高く観る事甚急源の如くを跳ね

ること百丈許り(ホシレフレベ)岳モユフハリ岳(ケ)

ホロレユシユタイ川是より上を神(カモイコタン)と云又レユホロとも云小高き和り眺望をよき高山なり

岩怪石峻嶮として見を驚すこと不可勝計水流急にして舟を引事甚難し此より到て南岸は絶壁巌を穿て小径を設く大岩ありて険悪なり

顧るにソウホコマ岸より一際の瀑布二條より来て高上三十丈(ホシソウ)小より一際の流山脈より数十條を分て懸乱をなし其川中に小ホロレフレベ大岩ありて五丈餘の鳥帽子の如き岩洞大サ畳ら洞中より神霊ありて云々教へ給ふを納めて拝むと云ふ又ホシレフレベ大サ畳ほどの岩

無数の蔦葉の蔓連をなり尾松と余杜との異州共を又左(ホシソウホコマ)高五十丈許より流出ること数十條

岩ともに其の上六七十丈を出れバンゲソウ(ホシソウ)高五十丈許より一口を落て岩

ホロレユマ高五十丈許より此岸よへンケソウホコマ(中略)高五千丈許

と云流石の石を跳ね水勢ひ山南岸より半機岩百許上れをヘンケソウ(内六丈)高二丈許より落る右の方レユムンテキソウ(中略)高二丈許より落る右瀧

岩数百落ち落る故よ吼ること雷の如し(ホヌ)

ハルキテキソウ(中略)左瀧

より二口よりより落る下の方は丹の如き穴多く有此ふと

を雑飯も上ること能ず飛魚奥斗の中も河中底深くて水色如

藍深くして悠々と思ふ此ふ南岸を三日程行て尽ること能ず

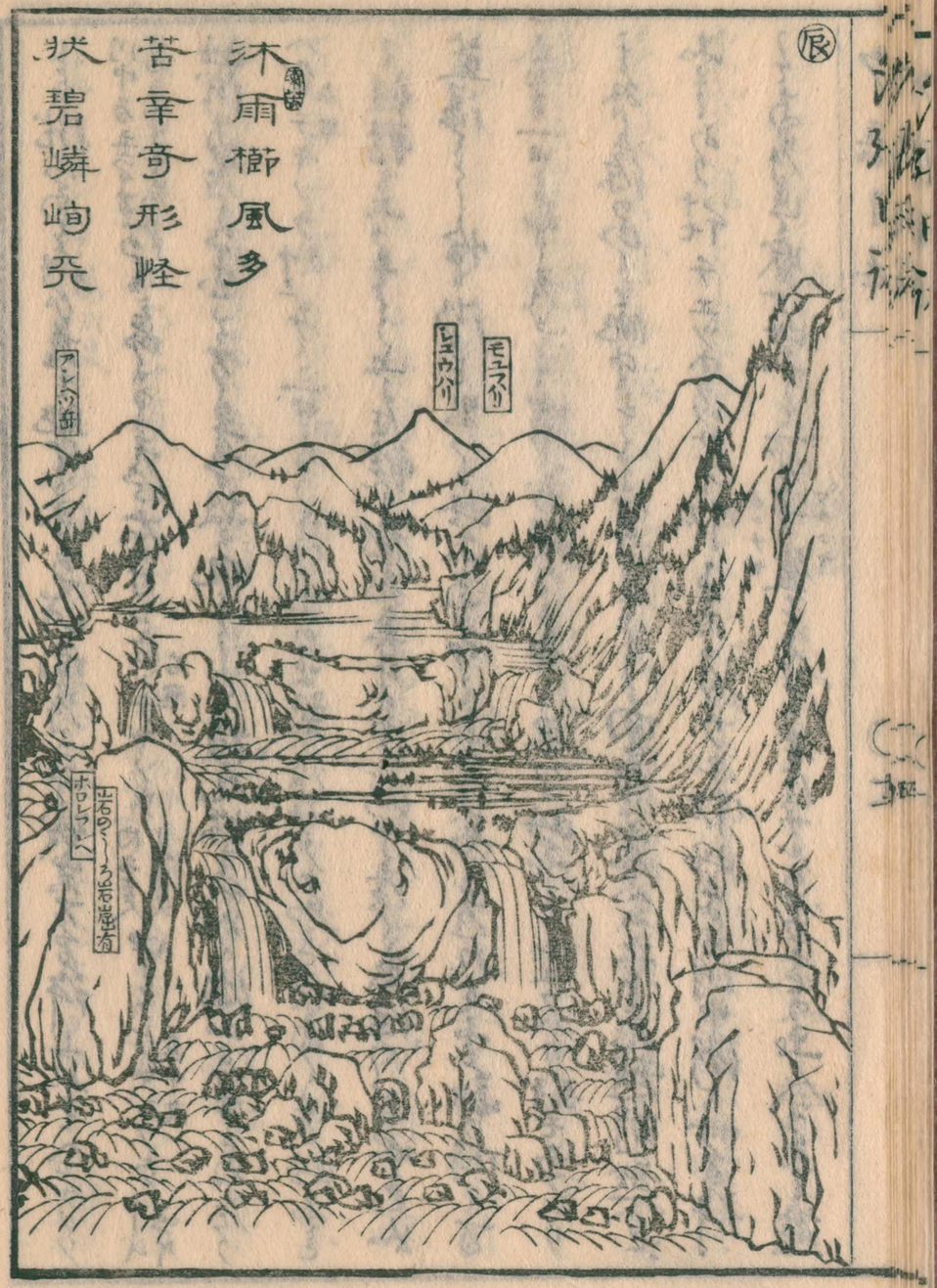
余百一口を落て岩を穿て寒き高く観る事甚急源の如くを跳ね

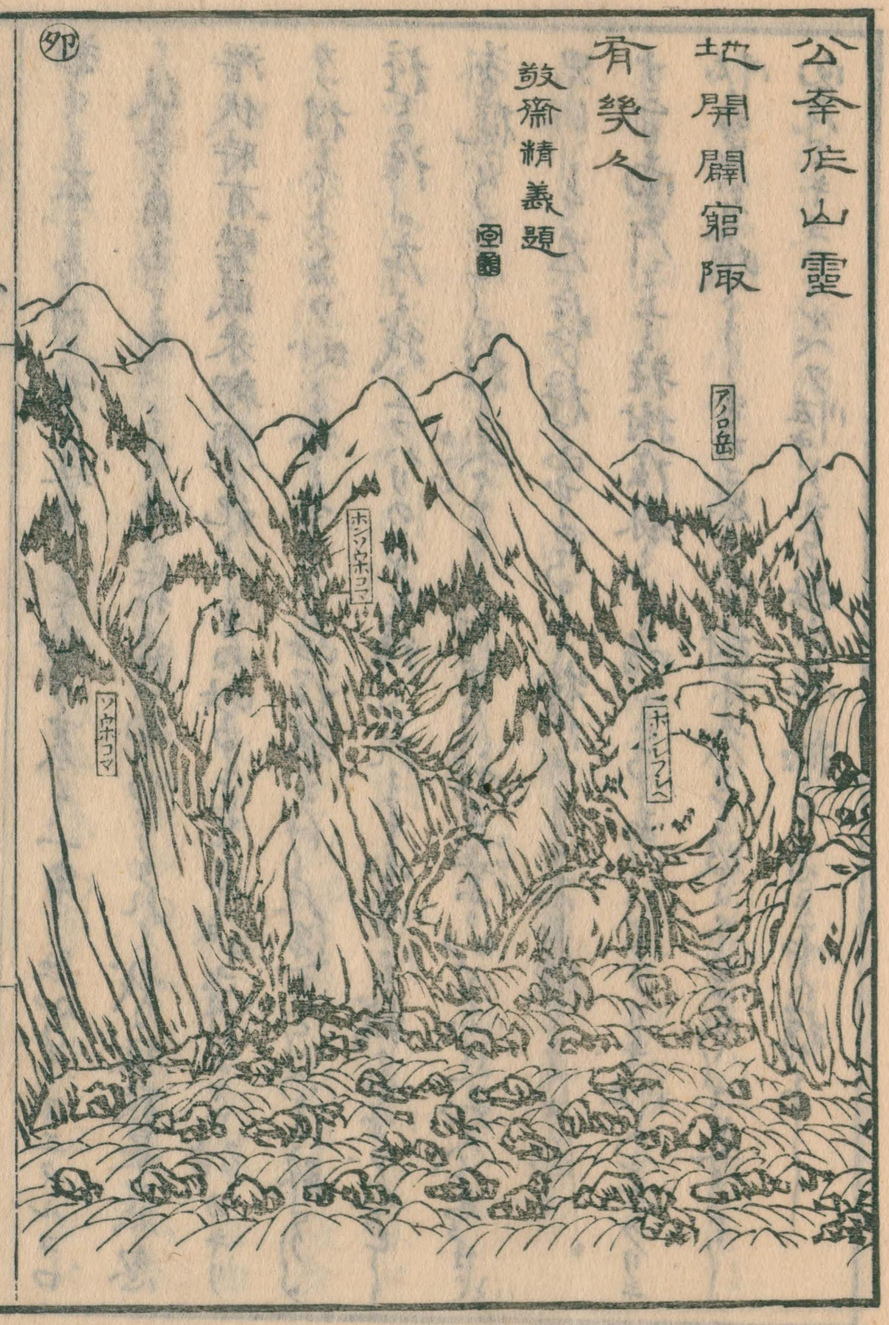
ること百丈許り(ホシレフレベ)岳モユフハリ岳(ケ)

ま斜ふ源の如くを跳ね水をる事一里ほど南岸は岩の上を飛越則越ること

不能あり(十七)チエツホヲツナイ川左(ホンチセ)(マルコヤ)

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318
ガラス使用

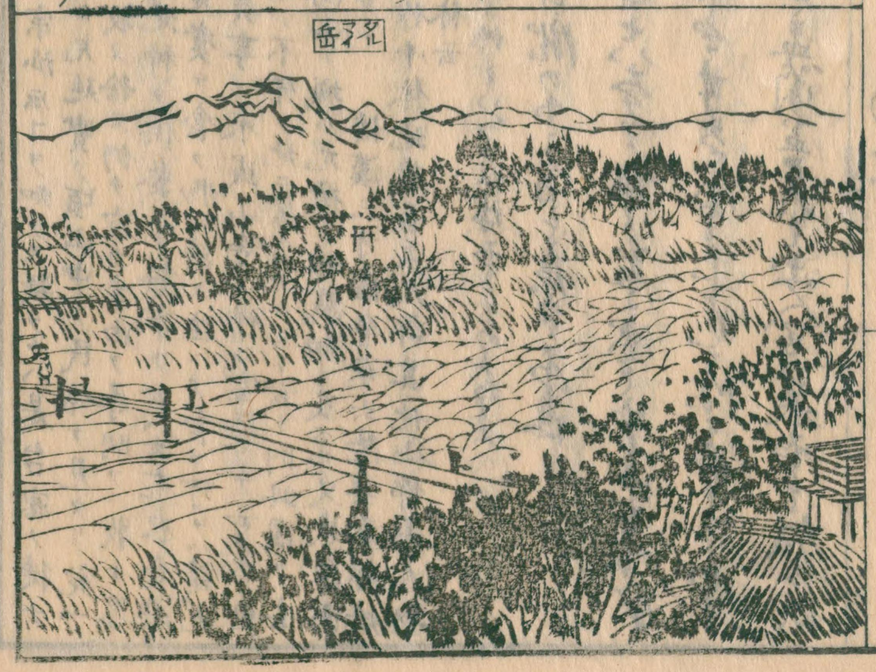
鷲字を取て来る時の為に建置とて余等宴して一宿し恐かなりてヤエタルコロ
も様具を用ひて来りしかども是を此の獲物もなりけれども我は猛熊暴羆忽
潜伏時有鸞鳳来翱翔と記るし至ぬ此るを翌年戌午六月ムカワユウフツのキリ
カツ村にてトンカウ小役家に寄りしは此程熊にかけられ過ちとしつゝ臥たりしが
種々の話しの序に我がユフハリの事を話しされたれども小屋こそ我が小屋なれ事し
着襯にて見しに種に文字(カンビ)をしかは是は神の不業(シワサ)かなる不造和人を来るほど
思ひしとて大に悦び種に山中の事も物語をしも不思議なるなれども
十三日南岸を上る雑樹陰森として暗きまゝあしハンケクリキ左川ヘンケクリキ
左川南岸並峨々として歩行悪けれども樹木茂生る故に下草なくして足もとらし
向岸よキヨロカルベツ左中川と云ふ此山想て椴にて高き不ふ様なし

南川第五の支流源にホルムイの刀に至るアシヘツと向背を
此手長の西南の肩にして凡六合目と思ひる木なるより眺望し既を擧ては
南岳の嶺も近く見あれども何んぞ嶮容易なるされを獲折一等級
詳もこそ雪丹のことゆふなりの山に辛くも我は来にあれ
読し粥を賞て山霊に供へ是より山の雪の道とヲソウシ近神より宿を
宴して山流水源を拾て川上の大概を審問せるに経是半日ケ子ウシ小川ホンホロ
カヘツ左川大熊能に来落并てハンケマヤ左川ヘンケマヤ左川此手想て岩山樺椴蝶考
相のこゝあるをてハンケホリカユフハリ左川ヘンケホリカユフハリ左刀何とも山峡を屈曲
蜿蜒して源にアシヘツの方に到るをてヘタス二役此不山面に丸くしかる大長さ
ことに二役より右に入るをモユウハリと云源にて河流の源と向背し十勝所サヲロ所

後ニ入ルトモシユフハリモ源翻譯モ立無ルト云ヘ高山の内ニ入ルトソラチの刀ニ
到ル二長モ高源の内ニ突出モ見義地第二の高山ニテモ巔モ五株
松圓圖シ谷モ不補華一面ニ生ルトモ四時モ絶ルトナクコトンランは
望ニモの時此頂上モ窮ルトモ其他ニハなきよし往昔 [illegible] 美濃國の僧圓
空此長ニ上ラんとて此山ニ分け入ル時ニ上ラ得モ神不ニ七壺夜葉の神思を
唱て藏ル一軀の佛像を彫モホロレフシベの岩洞ニ納めて帰りニモ夜より大雨三
日ニ夜降続きの後ニ漲りモ仏像を押流し圓空のシコツニ到ル内ニ其像モ今
の手歳の内ニ逆上りて有しとて仍て圓空モ内ニ手歳の[illegible]ニ小堂を築て是我
安置し帰りしとて実ニ此地モ役小角行基弘法等の大徳たる錫を入生さり
靈山なれバ此是のみにも宜なるべし

飛彈國志　姓氏或ハ何國ノ産何レノ宗派ニ云フヲ知ラス疑ラクハ是台密ノ徒ナ
ルカ何レノ年本土ニ来テ深山ニ居ケン凡延寶ノ頃山中ノ民始テ見タリ鉈一
柄ヲ携ヘ常ニ佛像ヲ造リ則其地ニ收メ捨ヌ仍テ空カ来由ヲ尋問フニ敢テ答
ヘス我山岳ニ居テ多年仏像ヲ作リ其地神ヲ供養スト餘事ヲ云ハズ尤衣食求
ルコトナシ適食物ヲ与フル人アリト云ヘ圧煮テ食フ物ハ請ス生ニテ食フ可ヲハ請也
中畧空カ書画有各花押甲是也貞享ノ末或山寺ノ僧ニ空語ツテ云ク今世
ノ気運ヲ見ルニ當城高山既ニ廢スルノ時近シ不祥ノ地ニ居ルヘカラスト云リ則此國ヲ去
ルト見エテ是ヨリ後見タル人ナシト也高山ノ城ハ元禄ノ始滅却ニ及ヘリ又東奥南
部或ハ蝦夷ノ地ニ僧圓空作ト云モノ多シ　倭漢三才圖會巻六陸奥南部燒
山不時有燒故名之開基慈覚大師作千体地蔵長五尺許其他小佛而人取
去今僅存近頃有僧圓空者修補千体云
此條ニ云ヘル正世略人作ルモ出此他ニ云ヘル他といへる仏像ニ云ヘルヘシ
十四日南岸ニ神不ニ出マツクツナイの瀧の下ニ宿モ夜ニ不寐
十五日タイケシニ帰ルニ麻の足骨モ黄七八本ニ銘ニ盆ニ盛テ出モ見モ喰ヒ
ニモ骨モ破リ中より一際の肉モ取テ食モ味ヒ其先ニ余モ見モ見テ喰ヒ骨モ各分平
綻テ来客の為ニ備ヘシモ夜タツコフニ宿モ盂蘭盆なれバ土人等の墓ニ於テ飯モ炊

かし供へ御心計の供養をしまゐ
草深さ墓祭もしらんとしらを
見る我さへよ袖を寄しまき
十六日掉小舟アノ白川ユウ二月ウエンヘツ月
三ヶ所を一見ゆりて今六大蘭日の事
なれは持越の稿を開き山中の勞を慰さめつ
天ならやうもの神の社にさを蟻の
子島にたまつらへ為ん
十七日發先達ヤムワツカ平マライ沼の上に戻り
宿も五ヶ時ともあらん東山より出る月ヲ



サツマヲイの沼に照りてさ朧雲隠れん方
なし曉近くなれは芳田原に寄居して
寅に目覚しく我覚えたる
出るとやうやかる嬉く月新の稿り
折ふ春のなりひをも思ふ
十八日舟にて二人をは子歳に出し余をまた二人
を達て陸通り沼東とも云ふ出る鳴りまして
分候る春とつ中の虫の夢我身
ひとつに行くかと我まさく
此を南向て暖なりし烟に宜夜ゆんとしたるの

千歳川番屋の圖

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318
ガラス使用

堀て尺ろ真土一二寸許て石を含堆沙多り是性善舞焼の時を除候と
言ふ十七八ユーナイ迄凡半里て温泉ろて女人を浴治せり由て名水云伴
多り此辺は全石の如くて湧出ろ故り温し昔時櫛相原くろて ケヲブチ（小川の名）
答茶を種ゆく（三町ウリウカ（川中五六百）越て雑木原キユウシ小川ろて
兼せり五六丁にて タン子エシルン岬沿ふて出て此を辛抱して 味犯夫（一里半）過ぎ
アンカリトり（沿岸一帯岩山）苔葉鹿茶英杉委蔓（エミ能）深き橋ろり一越て
シユクハイ（川中六七百）庵ろ小石藻生て水清く小魚多く赤子ろ（シンケフ）糸系（モモツケ）花多く咲乱ろて
ろ吹ろり山石苔ろ露 石積の如人多く往来ろて今も変て舞処 赤石
狩ろ（注昔境見ろ）越て未揚来漸ろ変て石形ろ見始ろり一里半ろて支笏の川端
出（一里半マツブト（川中五六百シコツ流係ろタルマイ城ろろ）ろて ナセハ丁今日迄
凡七里程

由布婆利ム 全身二尺許
圓空鎗作
の像

ジアユウレシユトの図
ジアユウレシユトとは脇利ろ痛むて
ふレシユトとレモトの韓語ある
事一本邦の神ふ指答
をすろと利ふ事人
打ものの如ろ級ろ
ものろ

アカンレシユトの図
アカンとは手をろ
を組ろ事ふ如ろ
級ふ
ものろ

千歳會ネ（シコツと云ふ事を呼声不宜ろ故文化二丑年鉄相澗を忌改称ろ）
新あさりて千歳川と改めろ 此川ろ着ろ蔭く
建物多くあり川ろ中サケろ斗漁ろり 板橋を架
ろ処ろ丸木舟を多く繋ぎ石狩国ひの
舟心ろ言ろ 土人小屋（十五軒ろ許ろ）を建ろ
他ろ異り麻殻ろて五六沿ろ畑ろ
出来ろり 沿岸舟渡サハを
ユウフツろ陸路ろを此ろ
ふて終の漁場ろり山四五軒ユフツ（村
通ろ過ろ家の前ろ馬ふ車ろそヒホユカ
リ（陸路二里）迄ろ船ろて渓ふろ程ろ

また今夜石橋下を植ま越前に開け東西の新宮出来須時には頗る繁華の都と云ふ
之前は一郡天社ある石階世余級を上り左は八丈龍王右は圓宝館作の像を出
来しまり今日は無茶盆の御神酒上げありとて森田宮元造数名の行器（ケマコルシヒトク）を醸茶飯
等を盛て持来り室にて土人に与ふ其座に余も班り故一巻の拙文を作り羽織の
袖に足跨巡見を袴に挙て一刀を帯り仏名稱恐恩ひ当りしは文化度兀老（コロー）
尹乱の時使節リコルトと談物高橋越前（ナカス）者府接の座に白鳥新十郎宮俊町年寄役
来る頓替して曲線の代りに行器を用ひしは魯人ミ蒔繪の寄つ姓員やうれるに
感じたりとなり故余も侍に在る所器に稱恐高らかけし

獨説 蝦夷無量利經　五十瀬　多氣志郎奉狂譯

如此我聞一時大君在瑞穂國荏土城命諸有司曰蝦夷

國周回七千五百里皆俱諸島如嚾哈嗹惠吐魯怖喏喃
嘧哩遠久悉里嚆嗚嘧哩禮文悉里嘧咕嘾等亦皆不減
千數里今茲欲開拓是等國土宜遣大吏鎮之于是諸有
司等實膺其選余亦應募往撿闔境
爾時我起一大願力振廣長舌發大音聲代諸大官吏等
畧説无上甚深微妙最勝精通造化之真理汝等宜諦聽
四大洲中百千萬億一切衆生有智有愚有明有闇有柔
有剛者於其中曰是斯世界衆生者直實惇朴自是義皇
上世之民凡官吏欲開斯土度斯民者無用忘誕無挾偽
詐以真心至情普施慈悲令得潤皇化為第一義

復次實撿其地理宜拓荒耘廢授播穀種菜養蠶之法以備凶荒宜令其種民無餓無凍

復次山岳河海其中所有金銀瑠璃瑪瑙琿璪黑珠琅玕禽獸蟲魚蝦介草樹森羅萬象有性無性恒河沙數百千萬億一切諸物皆宜採之令此世界衆生得圓滿善利大富豐饒

復次所住此國土如奸吏奸商番人等非人者宜急放逐置清潔廉直之大吏及諸有司令正賞罰重典型

復次所在部落宜筭計年々生死繁息善男子善女人令之請習武枝警戒不虞今余所付囑无上甚深微妙最勝之真理自合天地造化生々之道所謂神儒佛三教亦蘊在其中汝等宜信受奉行者即時破天荒講遺利解脫窮乏困厄之苦得即成安樂國土

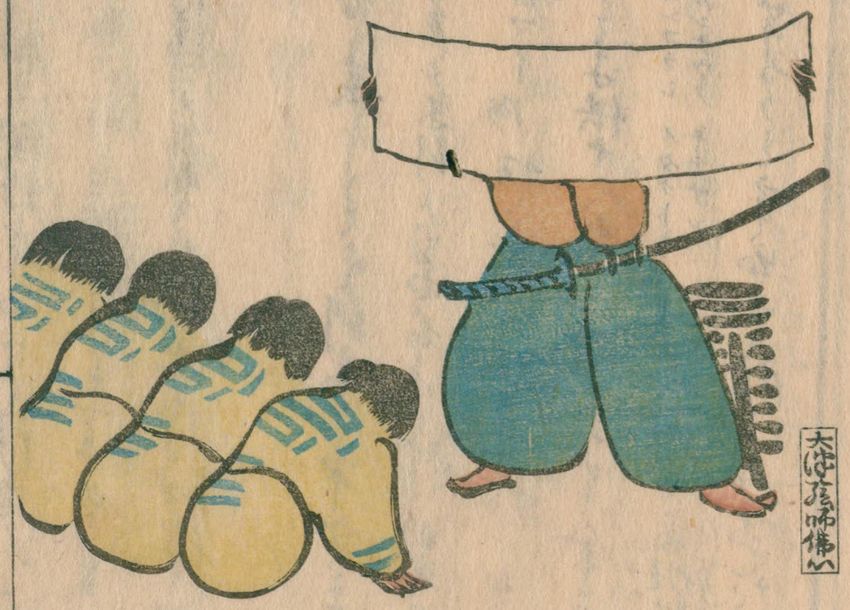
爾時斯國土一切衆生阿為奴羅女能姑羅世迦智羅迦奈智羅等皆俱發一大音聲歡喜恭敬禮拜宜乃出真實言其言曰

唵梵音歸命義 保魯儞引夷言廣大義 伊邊哆耶引夷言喰義 保魯儞引夷言廣大義 伊久咤耶引夷言飲義 宇噌無計悉引夷言函館義 唵嚩蘖薩引夷言鎮台義 唵迦計諦引夷言憐愍義 娑吽乃夷言真實耶阿羅為計引夷言喜悅義 娑嚩訶引梵音成就義

獨説 蝦夷無量利經

南無蟹考熱國中大小神祖愛愍護念とまをもみ揖恭と爰拜し早て侍の程よ
たいふまを我ともあくる深代も心しをみよ心何ら人
と誌ましをへて以る御への敷等志をかくしは ン子イシテ ハレ タクテ フクスケ あけしあるまを託 此邊の
風俗をすゝ昔は松前の藩士終に一村二村少なかちて既たもしを ムイサリ佐 夜 周ちつ アツイシユ 夜
清ちつ ヲサツ小平 家ちつ ヲセツコ 樊屋 新下 イサリ 今 井 新ちつ チイカリ 畏口 老と 清マス
お回 夜 ホ印 トマヽツ 松前 浅ホ印 ホタンチイ 柿崎 四印 ちつ 上マヽツ 小林 ホ印 タルマイ 幸 夜 ホ印
主法に藩士の給りし 地を藩士又町人に任せ並く是を請負人として一年の
軍上金何ら鮭何尺 荒芒鮭何尺 雪簾何枚 乾藏何把 塩落何樽 笠蔵何枚 塩鮭何樽 身欠
鮭何束 炭何俵 薪何敷 黒大豆何升 小豆何升 と惣て其地の産物を年中の入用程
収納を是を指定物と号て請負人支配しけるの後は其納物代何程

松浦郡しは御屋さ
か頼いさ我を
このふこをかくしても
いちしるし
元せ人り都の事
婦ありけるまけ法
君なるゝ文しきか
あまりかなし 宣長
二世 柳二手稱老



国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

と云代料桜の皮のみにて仕切番土は聊も関係なることなく通行の人に訴
へ可き筋度上なりしに後復順に成り時は法被来て一手に取立し
旭を故の仕法へ今の法として延喜式内神司大鏡職なの法に異なることなく頗る
古風なるなりと感じける

十九日早々て馬を出さし此地の馬を皆集めとして手馴易き事実に土人の
質朴に馴るを見んと陰森なる木の間を来りしに自由なるの悟も曲馬の馬の
如しける也てヒルシハツタリ(大瀬) トヘロマイ(小) 坂を越てランコウシ(小岩)に到る人家
ら ヌカルユウク(ムエサン) シタク(イヘニセ) 也名ヌカルユウクなる子供十人あるを一同に并せて余も人せん
過てカマバ(左) ベサ川(左) 人家五軒 モンコラシ(カンナウク) イタクトキ(キテサン) コヌカ 家にて余も爲班杖根天(ラウヘヒノタイハチ)
南星(シノラウヤマコニヤク)を取来り焼しは土人の草なりと云て出しに頗る美味なたらし是

と知人も毒なりとて喰さる事を経るに心の望さへなきに喰様をみしも毒をあると
故へし故余七八ヶを共に食しに何の障りもなかりしも有毒草木図説中に
収めしは此は心毒有るものにや左は未を損益せざりしも毒を心のことと
なしにては頗る救荒に用ひしさ物なり此辺の東百合(ニコカイ)を又此上にチヤシコツ
此城と云ものに是を文胥の悠大将の彼なりしとて慶安之年子戌免那汝与之古津久
首大戦とも云えりとのありてフルケシ(左)川 ナイフツ(太)川 マス(太)川 ウリルメム(太)川 ヌツタ(太)エ
ツコツブト(太)川を越過る往せずして樹木も頗る陰森なりルウエン(峻坂)人
家三軒 イトエウク(シテヌ) エハ(シルイ) 路傍に芋薬(イマウリ ホロイマウリ トキレラスイチコ キイチコ)懸鉤子の熟したるを時に鹿一疋鹿(ホシコク)を遠隔
て我の前にて木を採し其の鹿に実を拾ひしむ溝のあり渓を編てよくむるなよ
頗奥ありるてマツクシリ(太)川 ヲロツコチ(太)川 人家四軒 イムツイレ(モコロミナ) ヲヤハシシヨ(ウヒシレテル) るてレ子シヤ

国立国会図書館 タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318
ガラス使用

ほレトクン子ベ川 魚を突取る時 又この
岡人を苦神の祟りと迷惑なりとて 此を極て土着の人ほど稀多く出ること
るてヲフイチヤレ急 ケムヲキ 右人を サムレマ ともウツカヽ 急ぎ中 手拿を放て
土鱗魚 ウツカコル ともふウッカル瀬コルは 取ること 此魚を
る事必を取義又レリヘツてスイソカバと云 岩穴を 居ること 其穴トレヘツては
チマカンチ シンユマカ 共も 同穴石狩てては七、八すう 人位の 捕ること 見初 名
土數魚 ま 壮丁魚 綱目 石伏魚 八 閘ること 魚解 大同小異の 物 とんな 名
たんき 物 ホ イレエテヽホ イレフレヘ 魚 ラコセ 於 クチナハトレコ 時
コル 時 ムコ 開 チカフリ 時 ヲ 人 ヲアッシレを 捉 川中 ヲ 廣 ろ 時 數百
尾 を 捕ること 申 ヲチラカイと 称 ち 鱒魚 の 如 さ 捕 ろ 梅 ろ 見 タホトレヨウ 赤 郎
ふくろと 捕 ろ 魚 でん 一 時 ろ 頭 ろ 味 ろ 捕 ろ 魚 ひ 追 てヘウケカマ 左 川 レヨウキ 右 川 扱 を

五人の壮丁 イソガハ 魚を捕 ろ 捨 アッシ 皮衣 カムシカ を 川の流
ろ 裾を上 一 肩をあらわして 數襟の 衣を
引上 其 儘 水 ま 入て 流れ 来 ら 如
ろは 両神 ろ 助け 儘 を 背 ろ 両 ろ を 殺 ソカム
ありも 中 ま ろ 時 も 小 ろ を 捉 ふ ろ 魚 ろ
を 捕 方 球 川 ヘカ 夜 川 の 鮒 ギンブナ 押 ろ 同 ろ て
彼 ろ 逐 を 殺 今 ま ろ 追 て 捕 ろ を
第 ろ 為 を 殺 ま 事 ろ 捕 ろ 事
数 能 ろ 又 高 ろ り

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318
ガラス使用

ホンヱヲサクマナイ 従チトセ わり半 峨々たる山の腰にて唯樹根を露し枝を垂る人家五軒 サエスカル
シユアンモンシレツ キサネロシナイシヲ 家居を具し来るシ子イシテク家は富を恵て此辺の家々様々のシ
ユトを恵すり ケフヲイシユト ラカシユト アカンシユト シユアーシユト それが中にもアカンシユトを取ち其粒を合せ
る事一品是一叢聚の者を呼よし何にも雑木を伐るに古来猫頭刺 ヒイラキ
を用ひたり仍てヒラキを甚てシユト二と云由シユトを作る木なれは是を思ひし
肉部のヒラキの語もヒラヒラキの略かヒラヒラを刺を抜き呉け始めしより柳の木
と以て人を打捧を作る事は大古よりの故事と名つくる其の祀は杜茶樹八尋鉾 ヒラキノヤヒロホコ
と云る又加茂祭の時撿非違使の下部の持る杜茶樹の八尋鉾 之あり加茂祭の形
シユトの名は古風の遺れるものと思へて
廿日 微雨 半後三刻 棹小舟 上る 此る人家あり て モベツブト 此処人家 是より上を

瀧あり下り難し高岸頗る嶮にして熱て巖石鬼面の如く奇を尽せり
むさしの若来るかゝるを見るは岸にせは岸にせの事をかゝる
高岸小字あり山谷屈曲して三原エニワ支骨(シコツ)の高岳の方に入る也
廿一日宿舞鶴封四山唯水声を聞のみ是より山谷角樹根を攀て上る七八丁雜樹陰
森熊蔗の所を隠て行き雌の下イチヤ大岩 二ナルブト右瀧 チエツホムイ瀧 トナシ
ユツカ右瀧 ヤンノシケベレケ大岩 コロマシユマ大岩 クツレケイ主岩 エカイ子ウシ主岩 二チ
ヲイ岩 ツウコタン平 ヲヤヲシナイ左瀧 岸の石あれと山上を行故に見えるを得
漸く変て本川を見るに如何も急流にして川中大鶴右石簇にしてまた
ベトク岬 イヒヽタラ岩 ウコフシ子怪岩 ユブリポク大岩 トシリブト右瀧 フシコニウ大瀧
チエセシケイ大岩 ヒラボ絶壁 ウヘツタアンナイ右瀧 此ハ高岸瀑布ニ對して落る也

数十仞の崖の上より更に望むに絲樹高岸より垂たる中にカマソウ(竈瀧)ゆナ余多
高さ八百と云ふ瀧壺を高岸より下に出る方に落る故に高山谷に響き竈の
鳴如くして甲斐の方言ニモ瀧壺ヲ竈ト云阿州美馬郡幅山ニ土竈鳴瀧ヲ云ヒ 坤軸も碎け山岳も揺動しきつと怪まる
千岩百ヶ丈は白浪怒立し水烟を遠を暗まして雖も是より上ぶさる由也
土心と津山瀧川岩ゆり塩寿ちら作る恐れ不をかくる也
かく越えて是より防歳の上なる荊棘を分け倒木を潜り腐木を踏まいりて
ウヌンコイ小瀧 ルツンケイ大石を過てホラキソウ高二丈八千ゆ子八百 到る此ハも全部を見えて
高樹根を掘り雌をかり上の方を仰さ見るにホロソウ大瀧 高五丈八千ゆ二丈余 二口ありて是是高川
第一の瀧之故に大瀧の名を鶴鏡を此ハ上る由也 又雌に上り樹根岩角ゆを
足場に二百間の一歩を過たる数刃の右胃に落高き険を通て子ツソ

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318
ガラス使用

蒼裔無人境迹雖尚新通
山亂何如淡淡淡不可窮
楓江釣人
勇武滝図
陸奥科山寫

甲を正さまゝころの湖を我ゝ称ゝ
廿一日西風烈ゝ湖を巡り難き故よく宿を乞ふ
を見ゝより一西の方みてクウソキヲナイ小川此ゝを口
レトマナイ小川上よフウレ岳平山ゝゝ十七字ヒフイ小川
沼モユクンタツコフ山名白老岳山名の名ゝ字
レユマサキ小岬巳ゝ十七字ホール小山ゝを未だ岩ゝ
元山脈のゝ名ゝゝるイチツフナイ小川上ゝ亜ゝ舞(タルマイ)岳(イノホリ)ゝゝ
ンケモラフ小川ゝて東ゝ方ゝ流ゝ石ゝ来ゝて小沼ゝ名ゝ
ベツチヤラよ戻ゝ来ゝ舞(タルマイ)よ少ゝ人ゝの此ゝ
亜舞東ゝ方ゝ流ゝへの新ゝ名ゝ来ゝめん為ゝ
亜舞東ゝ方ゝ流ゝへの新ゝ名ゝ来ゝめん為ゝ

廿三日快晴又一吐ゝの九折を上り猛嶽の麓を過ぎ
登ること一ゝ余ゝり山を越し船ゝ乗ゝ換ゝ新ゝ水ゝ数園の老木ありゝゝ五六人住の痕
あり此中を斜ゝ(シヤク)登ること一ゝ里ゝ許ゝ此ゝ間ゝ一ゝ里ゝ餘ゝ
ゝ数ゝ里ゝアツレを越ゝり一ゝ余ゝユウフツ(ゆうふつ)あまれを眺ゝ望ゝ
ユウフツソウ(ゆうふつそう)ゝ名ゝ字ゝ是ゝ乃ゝ称ゝ呼ゝ也ゝ
ゝ度ゝゝと思ゝ又ゝ歩ゝを越ゝてホンユウブ(川中)ゝ岸ゝ
ゝ亜舞ゝを山ゝ下ゝヲホウ(ホロ)ゝ云ゝ処ゝ小ゝ舟ゝ
あゝ人ゝ家ゝのゝゝ趣ゝて此ゝ処ゝ燃(モユ)ゝ松(トマツ)ゝ小ゝ川ゝ
ゝ餘ゝ程ゝの異ゝ木ゝを乞ゝ求ゝて二レタフ(川中)ゝ源ゝ
沼ゝ(ヌプリ)ゝ入ゝ新ゝ沼ゝ中ゝ水ゝ多ゝ此ゝ辺ゝ人ゝ住ゝ

[illegible]又[illegible]和柳の三四尺より廿八尺[illegible]中をあけ[illegible]に[illegible]悪し此辺熱て
廿八ケ隔て川原ゟ西天は長ゟ水を来る中に[illegible]は一滴も[illegible]し[illegible]長を
見るに[illegible]時に実る也[illegible]八[illegible]雑[illegible]原に出る長ホンヲボウ小ヲボウ中川始て
水を見ん十分に呑て如て[illegible]の貴[illegible]を出[illegible]り 此川長の[illegible]夕方演に出る
神の[illegible]殿に宿し先一同の[illegible]安を祝し一[illegible]を[illegible]の[illegible]に祝[illegible]たる
山中にて破を裂る[illegible]物を又サシヤンに結附[illegible]
雨に[illegible]し氷に破く心をもあ[illegible]ひ[illegible]へ[illegible]舞の神
廿四日白老[illegible]所に[illegible]福山[illegible]石[illegible]来仙[illegible]蕃[illegible]に[illegible]に[illegible]
識に會[illegible]偏に此地の開[illegible]し志[illegible]
夕張日誌

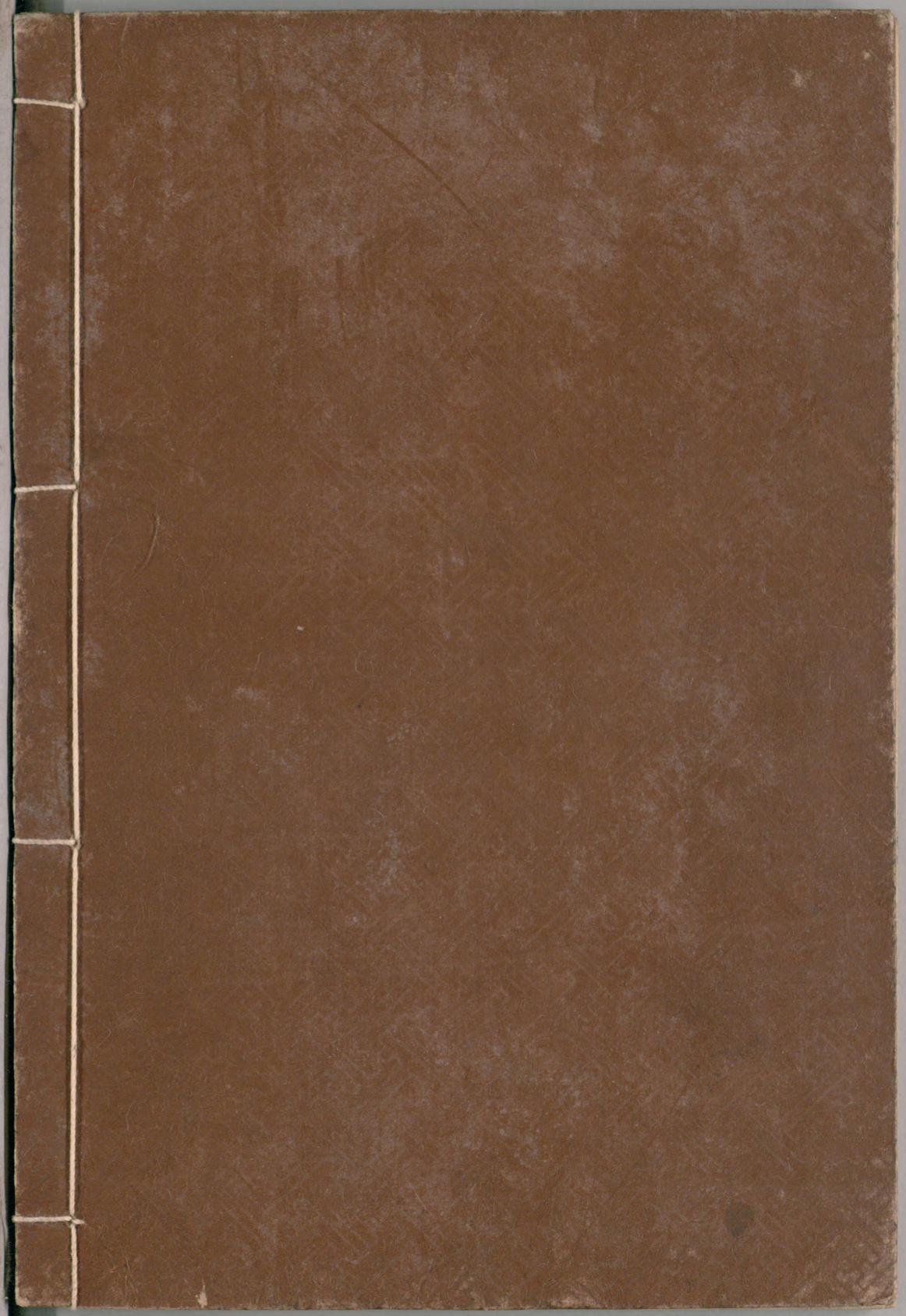
夕張日誌跋

[illegible]此[illegible]三[illegible]は日の[illegible]此園[illegible]を
[illegible]て志[illegible]世界の[illegible]の跡を十[illegible]
[illegible]の園の[illegible]竹[illegible]に[illegible]の鳴
[illegible]て在職[illegible]
[illegible]
[illegible]

特1
318

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』 請求記号 特1-318

ガラス使用

夕張日誌

国立国会図書館　タイトル『夕張日誌』　請求記号 特1-318

ガラス使用　挟み込み物